# 高齢者の学校支援と生きがいづくり
## ―さあ、学校に行こう！子どもたちが待っている―

直方市中央公民館ふれあい交流コーディネーター　　森　一郎

1　はじめに

⑴　活動のきっかけ

ア　高齢者事業

平成 11 年､県委託事業として高齢者の学習機会の充実と社会参加をねらいとする「直方鞍手地区高齢者大学」が開設された。

〔平成 19 年度から「直方鞍手地区はつらつ塾」となり、平成 24 年度で終了。
平成 25 年度から直方市の高齢者事業として「直方はつらつ塾」が開設された。〕

平成 26 年度直方はつらつ塾　受講生　428 人（男 46　女 382 人）

イ　社会参加活動は学校支援に

高齢者大学のねらいの１つの社会参加活動を何にするか思案中のとき、３年生が公民館見学に来て高齢者と交流したことが学校（子ども）・高齢者の両者にとって有意義だったので学校支援に決めた。

子どもたちが公民館見学に来て高齢者と交流　→　高齢者が折り紙で折ったツルをプレゼント　→　子どもたちからお礼の手紙とおたのしみ会の招待状が届く　→
学校でのおたのしみ会（紙ふぶきと歌で歓迎・折り紙あそび・給食）　⇒
その後も継続して交流が行われた。
学校支援　＝　ふれあい交流（学校などで子どもと高齢者が様々な交流を行うこと）
交流回数　・平成 10 年度　44 回　　・平成 25 年度　480 回　参加者　2,341 人

2　ふれあい交流

⑴　支援にあたって

ア　教師と支援者（高齢者）の役割を明確に

| 指導者は教師・支援者（高齢者）は教師の補助・手助け・手伝い |
|---|

※支援者はゲストティーチャーではない。

教師には時間内に達成しなければならない主眼（ねらい）がある。教師が支援者に任せて採点や事務をされていたことがあったので両者の役割を明確にした。

イ　支援者は無償

当初、「日当・旅費は出ないのか。」という声があったが社会参加は高齢者大学のねらいの１つなので今日まで無償である。もし有償にすれば交流回数・参加者が多いので財政的に困難である。

ウ　可能な限り地域の学校支援

学校での交流を通して子どもたちと顔なじみになれば地域でも挨拶・会話を交わすなど交流が広がる。また非常時等の安全安心に生かされる。

エ　高齢者の「宝」を生かした活動が多い

社会参加活動は高齢者大学のねらいの１つである。受講者のだれでもが参加容易な活動が望ましいので高齢者が長い人生経験から得た知識・知恵・技能など「高齢者の宝」を生かせるものが多い。

オ　教師・学校への配慮

支援依頼は電話でＯＫ。

支援者への接待に気を使わせない。ポットと紙コップがあればよい。

カ　高齢者への配慮

高齢者は学校へ行くことに抵抗があるので大人数で参加。（「赤信号、みんなで渡れば恐くない。」方式で）　前に立って話すことを嫌がるので小グループで。座って。方言丸出しでよい。

⑵　ふれあい交流の実際

ア　学習支援

教科（国語の毛筆等）・総合学習

道徳・特別活動・学校行事

〇毛筆支援校　市内 11 校

市外校　3 校　ろう学校

毛筆支援（感田小学校）

イ　学習支援以外

昼休みのふれあい交流

給食時間後の昼休みの時間に地域の高齢者が学校に行き、子どもたちと伝承遊びや将棋などで交流する。

縄とび遊び（新入小学校）

イ　夏休みのふれあい交流

夏休みの居場所づくりで地域の高齢者・ボランティアグループ・中学生と工作・遊び・マジック・学習などで交流する。

ウ　公開ふれあい交流

全クラスに支援者が入った学習を同時に行い公開する。平成 11 年度より実施し、市内 11 校を輪番で公開している。24 年度より土曜日に実施している。

来年度は　直方市立感田小学校で授業を公開する。

写真は今年度実施の新入小学校

国語「俳句と絵」

⑶　コーディネーターの役割

・最も重要なのは事前の打合わせ。交流のねらいが達成されるかどうかは事前の打合わせで決まると言っても過言ではない。　・実践力（１に実践…　２に実践…）

・できるだけ交流に参加する（立ち会う）　・連絡調整他

３　まとめ

毎年、年度末に交流した学校の担任、教務主任、管理職にアンケートで「ふれあい交流は子どもにとって、担任にとって、学校にとってどうだったか。」を無記名で記入してもらい評価している。

・やさしくて褒めてくれる　・習字が上手になった　・開かれた学校になった

・学校の様子を知ってもらえる　・不得意な面がフォローできた　・子ども、教師、学校がかわった　など成果が読みとれた。

高齢者は「孫のように可愛い子どもたちからエネルギーと若さをもらった。」と感謝されている。学校のため子どもたちのためと言って参加してきたが結果的に自分のためだったと気づき積極的に参加されている方が多いのが現状である。

すなわち、ふれあい交流は子ども（学校）と高齢者の両方に一石二鳥の貢献事業である。

問題点として毎年指摘されているのが、当然子どもたちがしなければならないことに手を出す「お節介」で子どもたちの自主性・主体性が育たないということ。

今、高齢者に求められているのは健康に老いながら社会全体や周囲に目を向け、生涯現役として学校や社会に貢献することではないでしょうか。

**【無報酬、けれど心は満たされる】**

〒822-0026　直方市津田町７－２０　直方市中央公民館
（直方市教育委員会　教育総務課　社会教育推進係）
TEL０９４９-２５-２２４１　FAX０９４９-２２-０７８５